
ブルーのちレッドときどきイエロー

みあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルーのちレッドときどきイエロー

【Nコード】

N7173H

【作者名】

みあ

【あらすじ】

蒼井宗太郎にはある秘密があった。それは何故かヒーローに変身出来るということ。少年が高校生になった時、彼の世界に異変が起こる。次々と現れる異形の怪人との闘いの日々、新たな仲間との出会い、少年は果たしてこの闘いの果てに何を見るのか。注…基本的にコメディです。

第1話：変身！

何を隠そう僕は物心ついた時からブルーだった。

気分の話ではない。僕の身体の事だ。

かと言って、体色がブルーとかそういう話でもない。

宇宙全体を眺めればそんな体色の人間もいるのかもしれないが少なくとも僕はれっきとした純日本人だ。

——話を戻そう。

僕がこの体質に気付いたのは保育園の年少組にいた頃だ。

当時、テレビで放送されていた戦隊物が子供達の間で流行っていた。

「俺がレッドな！ お前がブルー、お前がイエロー、ブラックに、お前はピンクな！」

ガキ大将が声を張り上げて役を割り振る。

僕はあまり自己主張をしなかったせいかもしれない。ピンクを拝命していた。

ピンクは大抵女性が演じる役どころだ。こんなことを言うのは何だがハズレ役と言ってもいい。

最近では女性差別だということでピンクという色を司る女性が存在しなかったり、居ても全体における女性の割合が高かったりと地位も改善されているようだが、少なくとも僕が子供の頃はそんな様相を呈していた。

「変身！」

テレビのヒーローがやるように腕を振り、はたまた交差させ、手

首に付けていると想定した変身ブレスレットのスイッチを押す。
それは毎回恒例のごっこ遊びの始まりの合図だった。
しかし、その日は違ったのだ。

「すげー！ お前、どこで買ったんだよそれ！」

気付いたら皆が僕の周りを取り囲んで熱っぽく叫んでいる。
正直、何を言われているのかまったくわからなかった。

「え？ 何？」

とまどう僕を気にも留めずにガキ大将がさらに言い募る。

「おい、俺にも貸してくれよ」

さっぱり意味がわからない。

いったい何の話をしてるんだろうか？

そのうちに別の子供が割り入って来た。

「僕がブルーなんだぞ！ お前はピンクだろ！ ブルーを取るなよ！」

周りからうるさいほどに詰め寄られ、苛立った僕はその子を軽く突き飛ばした。

ほんの少し手のひらで押しただけ、ただそれだけで男の子は宙を舞い、数メートルほど向こうの地面に叩き付けられた。

何が起こったか分からない。

その子も起き上がりきよとした顔をしていたがやがて頭から流れ出した血にびっくりしたのか大泣きし始めた。

そして、皆が騒ぎ始めるのに弾かれるようにして僕もその場から

逃げだした。

必死に走る。

気付いた時には家にいて、母が僕を抱きしめていた。

「もう大丈夫だから。安心していいのよ」

「母さん……」

抱きしめられた肩越しに鏡があった。

そこに写っていたのは青いフルフェイスのヘルメットを被り身体にぴったりと密着した青い全身タイツのような服を着た子供、つまりはそれが僕の姿だった。

「そうちゃん、そうちゃん……」

身体を揺さぶられる。

「そうちゃんってば」

母さんが僕を呼ぶ声。優しい声。

「ほら、早く起きないと遅刻するわよ」

遅刻……？

「いいかげんに起きなさい！」

「はいっ!？」

どこか間延びするような声で精一杯に大きな声を張り上げた母さんに思わず返事をする。

「はい……あれ？」

「やっと起きた。もう高校生なんだから少しは自分で起きなさい」

あれ？ 何だろう？ 夢を見てたような？

だが、そんな夢心地も傍らの目覚まし時計を見るまでだった。
7時50分。

「7時50分?! 母さん、もっと早く起こしてよ！」

「だから起こしてあげたじゃない。何、起こさない方が良かった？」

少し拗ねたような物言いをする母に頭を下げる。

「ごめんなさい。起こしてくれてありがとうございます」

「はい、よろしい」

そうこうしてるうちに7時55分。

着替え終わって洗面台に行って顔を洗う。

しつこい寝癖を直し終えて時計を見ると8時5分。

始業時刻は8時30分。もう遅刻を免れるためには他に手段がない。
い。

左手を前に突き出し握りこぶしをつくり、胸の前で水平に構える。

すると空中から滲み出るようにして左手首に腕時計のようなブレスレットが現われ装着される。

「変身！」

そう叫びながら右手を水平に構えた左手と垂直に交差させる。

次の瞬間、鏡には青い全身タイツのようなスーツを着てこれまた青いヘルメットを被った姿が映し出される。

ふと時計に目をやるとさっきと同じ8時5分。

「じゃあ、行って来ます！」

カバンを持ち、そのまま玄関を飛び出そうとすると母さんの声が追って来る。

「こら、そうちゃん！ そんな事くらいで変身しちゃダメだって言ってるでしょ！」

「ごめん、母さん！ 明日からはもっと早く起きるようにするから！」

呆れた顔の母さんを玄関の向こうに置き去りにしてドアを閉める。

もちろん、外に人の姿がない事は確認済みだ。

この姿をしている時はなぜか周囲の様子が完全に把握できる。

その場で地面を蹴り、一足飛びに屋根の上に登る。

「8時10分と。空を飛んで行けばぎりぎり間に合うな」

そう呟くと僕は屋根を思い切り蹴って真っ青な大空へと飛び立つ。

僕の名前は蒼井宗太郎。

またの名を大空の戦士エアリアルブル！。

たった一人の戦隊ヒーローの戦いの相手はまだ入学して1カ月ほどしか経ってない高校の始業時間だった。

そう……今日までは。

平和な時間が打ち破られる日が刻一刻と迫っていることに僕はまったく気が付いていなかったのだった。

第2話：悪の秘密結社

僕は空を飛べる。

だからといって宇宙まで行けるわけじゃない。戦闘機のようにスピードが出せるわけじゃない。

高速道路を走る車と並走できる程度にすぎない。

昨日と同じく遅刻間際の空の旅を堪能していたその時、それが目に入ってきた。

朝の通勤時に混み合う自動車にぶつけるようにして無理矢理走る一台のバス。

変身すると上がる五感を全力稼働させてバスの中の状況を把握する。

小さな子供の悲鳴、甲高い叫び声、そして低い男の声が高らかに叫ぶ。

「ふははははっ！ この幼稚園バスは世界征服を企む悪の秘密結社ブラックデモンの刺客ブラックスパイダー様に乗っ取った！」

は？ 一瞬呆けてしまった。悪の秘密結社？ 世界征服？ ブラックデモン？

いやいや、ちょっと待て。確かに変身ヒーローがここに存在してるんだから悪のなんちゃらが存在してたって不思議ではない。

不思議ではないが、何故に幼稚園バス？ 世界を狙う割にはちよつと小さくないか？

事件の被害者にしてみればたまったものじゃないが、それは無いだろうと突っ込みたくなる。

思考の海に迷い込んでいた時、バスが高速道路に入り込む。

警察か何かが動いたのだろうか、周りにほかの車の姿は無い。

猛スピードで走るバスの天井にそっと降り立つ。

そのまま這いつくばるようにしてフロントガラスの隅からそっと覗きこむ。

おっと。運転手さんと目が合った。そのままそのまま、とジェスチャーで合図。

首をガクガクと揺らすように何度もうなずいた彼は前方を凝視する。そろそろ精神的に拙いのもかもしれない。トドメは僕のせいかもしれないけれど。

問題のソレは運転手の脇に背中を向けて立っていた。

本物の怪人はやはり迫力が違った。カブトムシのような黒い表皮に包まれた異形の人間。

背中しか見えないが八本の剛毛に包まれた突起が飛び出してわさわさとそれぞれが別々に動いている。

そういえばブラックスパイダーと名乗っていたはず。ということはあるクモの脚なのだろう。

虫嫌いの人なら卒倒するレベルにキモい。

とりあえず、アレを何とかしよう。

運転手さんにしばらくしたらブレーキを掛けてもらうように頼む。もちろん、そこは気合でだ。

甲高い擦過音と突然の衝撃。

これを合図にして窓を蹴破って飛び込む。

もちろんその先にいるのは異形の怪人。

うわっまじでキモい。正面から見たその姿はまさしくクモ。

複眼というのだろういくつかの真っ黒いガラス玉のような眼が顔に並んでいる。

背中 of 八本脚に人間と同じく二本の脚……？ 合わせて十本になるんだがいいのか？

そう思いながらも飛び込んだ姿勢のまま車外へと蹴り飛ばす。

怪人が吹き飛ばされて反対側の窓から路上へ落ちるまで、この間

わずか二秒。

変身時は思考すらも加速する。

異形の怪人が消えて、そこにいたのは青いボディースーツに身を包んだ僕。

顔を上げた子供達は何を思ったのだろうか？ それを確認しないまま、運転手さんにここを離れるように言い、怪人の後を追う。よろよろと起き上った怪人は叫ぶ。

「殺す気か！？ 死んだらどうする！？」

「いや。いやいやいやいや。あんなことしといてそれはないでしょ」

意外に気弱な事を言う怪人の抗議に僕は右手でバスを指し示す。窓の割れたバスは安全な速度で遠くへと去っていく。

「あー何という事だ。大首領ブラックデビル様に何と申し開きをすればいい。これで何度目の失敗だと思っているんだ君は」

また新しい名前が出て来たよ。僕の方こそこんな愚痴を言われてどうしろって言うんだ。

「こうなったら貴様の首を手土産にしてやる！」

怪人が右手を勢いよく振り回すと指先から糸の塊がいくつも飛び出す。

クモの癖に糸を出すのは尻でなくて指ときた。せめて口から出してくれれば格好もつくのに。

「ブルーショット」

そう口にするのとどこかからともなく現れた銃が僕の手握られ、青い光線を放つ。

紙が焼けるような音で蒸発する糸。

もう片方の手も振り回し、そこからまた同じように糸が飛ぶ。

そして、それもまた冷静に撃ち落とす。

本当にどうしたのだろうか？

両手を振り上げた態勢で茫然と固まる怪人をはたして撃ってもいいのだろうか？

そうこうしているうちに遠くからパトカーのサイレンが響いてくる。

途端に身をひるがえして走り去ろうとする怪人。咄嗟にそれに追いつがる。

「我々は秘密結社だ。表の社会にその存在をバラすわけにはいかん！」

「あれだけ堂々と名乗っておいてそれはないだろ！？」

警察から遠ざかるように走りながら世迷言を叫ぶ怪人と、それを追いかけてながら突っ込む僕。

傍から見るとどんな光景に映った事だろう。

やがて怪人は高架下に跳び下りてその姿を消す。

「ふはははは。お仲間にも言っておけ。この礼は必ず返すとな」

声だけが反響して聞こえるが姿はどこにも見当たらない。

空に飛び上がってみてもそれは変わらない。完全に見失ってしまったようだ。

それにしても、あいつの言葉が気になる。

「お仲間、か……」

校舎の時計は既に九時を過ぎている。

間違いなく遅刻確定だ。授業で静まり返った校舎内を静々と歩き、目的の教室の扉を開ける。

「すみません！ 遅刻しました！」

「ふむ。理由は何かね？」

その言葉に考えこむ。まさかヒーローしてましたとは言えない。やはりここは常套手段。

「いやあ、電車が遅れまして」

「君だけが、かね？」

仲の良いクラスメイトはニヤニヤと笑っている。ここは覚悟を決めよう。

「すみません、寝坊です……」

「はい。蒼井宗太郎くん、遅刻減点一つ」

クラスに笑いが広がる。

晩御飯を食べながら母親と一緒にテレビを見ると朝の事件が

報道された。

バスジャックから保護された子供達が口々に叫ぶ。「ヒーローに助けてもらった」と。

「そうちゃん？ あれ、そうちゃんがやったんでしょ？」

「うん。そうだけど？」

僕は肝心な事を忘れていた。例え相手が母親であろうともその質問に答えてはいけなかったのだ。

秘密を守る事を忘れたヒーローの宿命はいつも決まっている。

「じゃあ、また遅刻したんだ？」

しまった。つい本当の事を言ってしまった。

その質問に答えられないでいると非情の宣告が下される。

「今度遅刻したら今月の小遣い半額って言ってたよね？」

迫る母親にゆっくりとうなずいてみせる。

喜ぶ母親の姿を見ながら僕は地獄の扉を開いたような気分だった。

テレビの中では子供達が無邪気にはしゃぎ、ヒーローの活躍を話す。

それは明日の朝刊のトップを飾る事にもなる。「新たなヒーロー現る！」の見出しと共に。

第3話：新たな仲間

「宗太郎、部活決めた？」

仲の良いクラスメイトの後藤君が話しかけてきた。

高校に入学してまだひと月も経ってない。そろそろ部活動も決めなければならない頃だ。

この学校では部活動は強制的だ。帰宅部であっても名目上は園芸部という部に所属する事になる。

「バイトがあるから部活動は出来ないことにしてもらおうと思う」

「そういえば、お前んとこは母子家庭なんだっけ？　よくやるよな」

そういう彼も父子家庭だったりする。その縁で仲良くなったようなものだ。

ちなみに家計の足しにするためにバイトをしているわけではない。

あのクモ男のせいでまたもや遅刻してしまった僕はついに小遣い四分の一を言い渡されてしまったのだ。

携帯電話の毎月の支払いは僕の小遣いから払う。

潤いある高校生活のためには週二回三時間のバイトで何とか工面するしかない。

おのれ許すまじ、悪の秘密結社ブラックデモン。

「この間の部活動紹介には無かったけど、この学校には報道写真部

つてのがあるらしいぜ？」

報道写真部？

聞き慣れない言葉に聞き返す。

「何でも事件の現場に駆けつけて写真を撮っては新聞部に提供して報酬をもらうんだと。おとといのバスジャック未遂の時もたまたま居合わせて写真撮ったらしい」

おとといの未遂事件。間違いなく僕とクモ男の二度目の遭遇の事だろう。

遅刻しそうな時に限ってどうして目の前で事件を起こすのか不思議でならない。

しかし、そんな部まで存在するのか。この学校も案外妙な所だな。

「報酬ってどんな？」

「気になるのはそこかよ。新聞部の連中に聞いたけど極秘中の極秘。気になるなら部長に聞け、だと」

部長、ね。窓の外に目を遣るとカメラを片手に中庭を歩く女子生徒の姿。

ここから見えるのは黒い髪とその手に光るカメラ。

「お、あれだよあれ。報道写真部部長の天雲先輩。あめくも結構美人なんだよなあ」

その言葉を聞いて眼に力を込める。
変身していなくてもそれなりに力は使えたりする。途端にズーム

されるその姿。

肩まで伸ばした黒い髪。ヘアピンで前髪を留めて眼鏡を掛けている。

制服はそれほどきっちり着込んでいるわけでもなく野暮ったいその様子を差し引いても確かに美人の枠内に入るだろう。

ふと、目のあった彼女が笑い掛けてくる。一瞬、心臓が跳ね上がりそして気付く。

彼女の方から僕の姿が見えているわけがない、と。

そして振り向くとそのまま向こうの特設校舎の中へと消えていった。

「宗太郎？」

「うん？ ああ、そうだね」

後藤君の声に適当に相槌を打っていた僕の脳裏には彼女の笑顔が焼き付いて離れなかった。

翌朝、再び例のクモ男が現れた。

今日はいつものよりも早く家を出た自分に拍手を送りたい。

ビルの陰に隠れると左手を前に突き出して拳を握る。

そして胸の前に水平に引き付けるとブレスレットが現れる。そして右手を交差させながら叫ぶ。

「変身！」

カバンは屋上にでも置いとけば大丈夫だろう。

そのまま空中に飛び出し急降下、混雑する道路の真ん中で高笑いするクモ男を蹴り飛ばす。

「みぎゃっ」

尻尾を踏まれた猫のような悲鳴を上げてクモ男が真向かいの公園まで吹き飛ぶ。

「誰かと思えばまたお前か！」

起き上ったそいつは僕を指差して叫ぶ。
でも、その言葉は僕の方こそ言いたい。

「それはこっちの台詞。毎回毎回朝っぱらから元気よく。たまには昼間に出ようとは思わないのか？」

昼間ならまだ会ったことのない僕の仲間が解決してくれるだろうに。

こいつの話によるとどうやら僕と同じ姿をしたヒーローが他にもいるらしい。

が、探して見つかる訳でもなく。仕方なく普通に日常生活を送っているといつもこいつが割り込んでくるのである。

「貴様は昼間に幼稚園バスが走ってると思うのか？」

思わないけど、いいかげん幼稚園バスから離れろよ。

「で、幼稚園バスを狙ってるお前が何で道路の真ん中に立ってんだよ？」

「ふっ知れた事。幼稚園バスを待っているのだよ。いつもなら五分前には通っているのだがな」

それはただ単にルートを変えただけだと思う。

何しろこの間の二度目の遭遇の際にも懲りもせず幼稚園バスに乗り込もうとしていたのだ。

幼稚園もいいかげん学ぶだろう。アホは避ける、と。

「今回でお前との戦いは終わりだ、クモ男！」

「ブラックスパイダー様と呼べ！ でないと青男と呼ぶぞ」

青男は確かに嫌だ。かといって、名乗りを挙げたわけでもないわけだが。

「勝負だ、ブラックスパイダー！ 喰らえ、ブルーショット！」

不意打ち気味の青い光線を鞭のように振り回した糸で受け止める。

糸は蒸発したが光線もまたクモ男に届く事は無い。

「ふふふ。前回までのブラックスパイダー様と一緒にするなよ」

再び産み出された糸が辺りの物を吸着して投げ始める。

ゴミ箱や空き缶、植木鉢やベンチまでもが宙を飛ぶ。

空き缶はともかく、公共物をブルーショットで破壊するわけにも行かない。

仕方なく受け止めることになってしまう。

「くっ、卑怯な」

右手だけだった攻撃に左手が加わる。

ベンチを受け止めた隙に飛んでくる空き缶が頭に当たって軽い音を立てる。

全く痛くはないが……ちょっとムカついた。

再び飛んできた空き缶を受け止めて投げ返す。

両手で糸を振り回すクモ男の頭にクリーンヒット。

軽い金属音が木霊する。

こんな物でダメージを与えられるわけではないが少しスツとした。

だが、今度は奴もまたむきになったようで投げ返してくる。

それを避けると再びクモ男の頭にストライク。

繰り返すうちに最終的にはゴミの投げ合いになっていた。

「この、いいかげんにしろよ、クモ男！」

「お前こそ邪魔をするな、青おと……ぶほっ?!」

終止符を打ったのは横合いから飛んできた大きな石。

人の頭ほどもあるそれはクモ男の頭を直撃して碎ける。

その場に昏倒した怪人のそばに彼女は颯爽と降り立った。

「ちょっと手際が悪すぎるわよ、ブルー」

真っ赤なボディースーツに身を包んだその姿は色とその体型を除けば僕と全く同じ。

その膨らんだ胸とほっそりとした腰は明らかに女性であることを示していた。

「えっ、あ……。ご、ゴメンなさい!」

初めて見る僕以外の変身ヒーロー。ついつい凝視してしまうのも

仕方ないだろう。

そんな僕に掛けられた一言はこんな物だった。

「何ジロジロ見てんのよ、変態」

身体にピッタリと張り付いたボディースーツは当然ながら体型までも見事に露わにする。

女性にしてみればセクハラ以外の何物でもないだろう。

「すみません！　僕以外の人を見たのは初めてなので、その、すみません！」

必死に謝ったのが効を奏したのか、彼女の視線が幾分柔らかくなる。

この際だから色々聞いておこう。

「あの、そのクモ男なんですけど、どうすればいいんでしょうか？」

差し当たったの敵である怪人の処遇をたずねてみる。

攻撃しても良い物だったのがずっと気になっていたのだ。

「ああこれ？　黒魔術だかなんだかで造られた合成怪人だから普通に撃てば大丈夫よ」

そう言って僕に倒れている怪人を撃つようにうながす。

良いのだろうか、本当に。

でも、早く撃たないと僕の命が危ない気もするのでこの際だから引き金を引く。

青い光線を浴びた怪人は軽い爆発を起こし、辺りは煙に包まれる。

後に残ったのは傷一つなく倒れるスーツを着た中年の男性。そして、手のひらほどの大きさのクモが一匹。

「えい」

軽い掛け声と共にレッドさんがクモを踏みつぶす。するとその足の下から黒い煙が上がって跡形もなく消えていく。

「どういうことなんですか？」

質問する僕に教えてくれた事を要約すると、黒魔術で造られた動物を普通の人間にとりつかせることでさっきまでのクモ男のような怪人にするらしい。

人間自体は触媒のような物でダメージを与えれば分離する。あとは分離した動物を倒せば終わり。人間には記憶も怪我も残らない。何の事も無い。普通に撃てば良かったのだ。そうすれば遅刻魔の烙印を押されることも無かったのに。

「さあ、これでいいわね。じゃあ変身を解きなさい」

いきなりの言葉に呆然としているとさらに言い募る。

「ほら早く五秒以内。5、4、3、2」

急かすようにカウントダウンを始める彼女の言葉に思わず意識を緩ませる。

一瞬で変身を解くと、彼女は顎に手を遣って僕の顔からつま先まで舐めるように見る。

「ふーん。君、高校生？」

「は、はい！」

登校中だった僕の姿は当然制服姿。近隣に住んでいる人間なら近所の高校の物であることもわかるだろう。

「あの、あなたの正体も見せてほしいんですけど」

勇気を出してそう言ってみると意外にも快く応じてくれる。

「そうね。じゃあ、後ろを向いて」

「何故ですか？」

「女の子の着替えを見たいの？」

その言葉に思わず後ろに振り向く。

「す、すみません！」

背後で含み笑いが聞こえる。

「その、まだですか？」

「ええ、まだよ。女の子は身だしなみに時間がかかるの」

衣擦れの音が嫌でも耳に入ってくる。

一体、どんな女性なのだろうか？ 期待が膨らむ。

「心の準備があるから十数えてから振り向いてね」

いち、にーさんし、ごーろく、ななはち、きゅう、じゅう！
勢いよく後ろに振り向くと彼女の姿は無かった。

「逃げられたっ！」

気付いた僕の耳に始業開始のチャイムが飛び込んでくる。
それは遅刻魔王に即位することが決定した瞬間だった。

「まーあれだ。元氣出せよ宗太郎」

後藤君の慰めも僕の沈んだ心には届かない。

小遣い八分の一に加えて、今度遅刻したら保護者を呼ぶとまで言われたのだ。

しばらく立ち直れそうにない。

「あれ？ あの人？」

後藤君の足音が遠ざかる。

誰かと話をしているようだ。

「おい、宗太郎！ お前に用だってよ！」

のろのろと顔を上げた僕の眼に飛び込んできたのは先日見掛けた
天雲先輩の姿。
あめくも

机に突っ伏したままの僕に彼女は声を掛けてくる。

「ねえ、明日の土曜日。空いてる？」

「空いてますけど、何ですか？」

「じゃあデートしようよ！」

それを聞いたクラスの連中が盛り上がる。

デート？ いやいやいや、馬鹿を言いでないよ。生まれて16年、女の子との接点なんて一つもありゃあしませんぜ。

何か裏があるに違いない。イジメか？ イジメなのか？ そこらにビデオカメラでも仕掛けてあるんじゃないのか？

辺りを見回しながらいぶかしむ僕に先輩が囁きかける。

「実はね、君の秘密知っちゃったんだ」

デジカメの液晶には青いスーツの人物。ゆっくりとコマ送りすると一瞬のうちに僕の姿へと変わる。

正体がバレた。僕は全身の血の気が引くのを感じた。

第4話：始まりはいつも唐突に

僕は何故ここにいるんだろう。

何度も時計を確かめる僕の姿は周りの風景から浮いていると断言してもいい。

既に約束の時間を十分も過ぎていた。

周りで同じように待ち合わせをしていただろう人達は既に待ち人を迎えて和やかに会話している。

やはり、からかわれただけなんだろうか。

けれど、正体を知られた以上は僕に彼女の誘いを断るという選択肢は無い。

寒気が全身を震わせる。四月最後の土曜日といえど、まだまだ肌寒い。

懐の寒さも似たようなものだ。出掛けに渡された今月の小遣い六百円がポケットの中で軽やかな音を奏でる。

百円玉と五百円玉、それぞれ一枚ずつが産み出すハーモニーはきつとこの世界で孤立する僕を救ってくれるに違いない。

そんなとりとめのない事を考えながら耳を澄ます。

多種多様の人々のざわめきの中に澄んだ金属音。そして、こちらに向かって走ってくる足音。

その足音は眼を瞑っていた僕の目の前で止まる。

「はあはあはあ……ごめん、待った？」

眼を開けるとそこには息を荒げて手を合わせるように謝る天雲先輩の姿が。

もうすでに約束の時間は十五分過ぎ、僕がここに来てから換算すると既に一時間が経過している。

前の日にしっかり下見をしたうえで朝の六時に眼を覚まし、念入りに準備を整えた結果だ。

決して初めてのデートに浮かれているわけではない。

ここは既に戦場なのだ。昨日の下見に付き合わせた後藤君にも言ったが決して浮かれているわけではない。

その証拠に僕は彼女に毅然とした対応を試みせる。

「いえ、僕も来たばかりですからそんな謝らなくてもいいですよ」

「そうなんだ？ さすが遅刻魔王と呼ばれているだけのことはあるね」

ヘタレと言うなかれ。申し訳なさそうな表情を見せる人生初デートの相手に文句なんて言えるわけがない。

僕も遅刻してたから大丈夫、みたいな流れになってるけどそんな事はこれから始まる戦いには関係ない。

「いやあ、僕なんてまだまだ。名前は知りませんが、何でも一つ上の学年には遅刻大魔王が存在してるらしいじゃないですか」

「……大魔王で悪うございましたね」

えっ、まさか本人？！

「いや、僕は単に先生達が噂してるのを小耳に挟んだだけで決して先輩の事を揶揄しようとしたわけじゃ……」

何度も何度も知らなかったすみませんと謝ってるとうつぶわいていた先輩が突然吹き出して笑い始める。

必死に弁解する様子が面白くてからかっていたのだそうだ。
無然としていた僕も彼女に釣られて笑い始める。
ひとしきり笑った所で場所を近くの喫茶店に移した。

「あ、僕は水で」「私は紅茶とサンドイッチを」

こんな所で支払うようなお金は一切ない。

朝食を食べていないという先輩が落ち着くのを待って、互いに自己紹介を始める。

「私は二年の天雲照。あめくもてるる 天の雲を照らすと書いて、てるる」

天雲照。その字を心の中に書き付ける。るが一つ多いんじゃないだろうか、一体どこから出て来たんだろうという疑問はあるが物事は真正面から受け止めるべきだ。疑問を差し挟むのは失礼に当たると思い込む。

しかし、彼女にはそんな僕の考えもお見通しだったようだ。

「変な名前って思ったでしょ？ でも私の母親だって雨の涙って書いてうるって読ませるんだからいいじゃない」

天雲雨涙。あめくもうるる 確かに良い勝負だ。そう考えるとうちの母親の由真ゆうまなんてのはまだまともな部類に入るだろう。本人は男に間違えられて困ると言っていたが雨涙うるるや照てるるに比べればまだマシだ。

「すごく失礼な事考えてる気がする」

目を細めてこちらを見る先輩に否定するように手を振る。
彼女はそんな僕にニコツと笑い掛けると衝撃的な発言をする。

「これからデートするんだから、私の事はてるって呼んでね」

いきなり下の名前で呼び捨てですか!?

それはさすがに敷居が高い。男友達相手ですら名字で呼び続ける僕にそんな恐ろしい事が出来るわけないだろう。

「はい、呼んでみて?」

「ホント勘弁してくださいよ、先輩」

固辞し続ける僕に彼女は囁く。

「そんなに他人と近付くのが怖い、宗太郎くん?」

ドキリと心臓が高鳴った。

「な、なぜ……そんなの、あるわけが……」

反論しようにも言葉が出て来ない。それはある意味真実を突く言葉だった。

僕は幼い頃の体験から他人と距離を置くようにして生きて来た。誰かに迷惑が掛からないように、母親に苦勞をさせないように。この街に引越してきたのも元々は僕が事件を起こしたせいだ。だから必要以上に他人に関わらないし、これから先もずっとそうなのだろうと思っていた。

「ねえ、知ってる? この街には昔、正義のヒーローがいたの」

突然の話題転換。思考の袋小路に迷い込んでいた僕は顔を上げる。

そこには笑顔のまま話し続ける先輩が。軽い口調だけどその話は心の中に響き渡る。

二十年ほど前にこの街に存在し、地球の平和を守り続けた正義のヒーロー。

五人の戦士達は力を合わせて悪の組織と戦い、長い時間を掛けてこれを滅ぼした。

その名も染色戦隊カラーマン。戦隊なのに一人称、何を染める気なんだろうと色々言いたい事はあるがそのネーミングもどうだろうと思う。

さすがに雨^{うる}涙^{なみだ}や照^ての^るインパクトには負けているか。

とにかく、彼らは悪の組織を滅ぼすと正体を隠したまま姿をくらませたのだそうだ。

「彼らは人々を守り、助け、手を取り合って悪の組織と戦ったそうよ」

彼らの姿は今の僕とは違う。彼女は僕にそれを伝えたいのだろうか。

「だから、呼んでみて？」

なにが「だから」なのかわからない。それとこれとは話が違う。けれど、それを言っても彼女は納得しないだろう。

僕も思い切って、一步を踏み出してみるべきかもしれない。

「て、て、て、て、て、て、て、て、て、て……先輩」

僕の言葉に彼女はあからさまにため息を吐いてみせる。

やはり機嫌を悪くさせてしまったのだろうか？ 謝ろうとする僕の機先を制して彼女は口を開く。

「うん。とりあえずそれでいいや。今日から私の事はてるる先輩と呼ぶ事。わかった？」

「前向きに善処します」

「ということで、私もあなたのことは宗太郎って呼ぶから。いいよね、宗太郎？」

イエスマム。僕は彼女に逆らえそうもない。

「先輩……てるる先輩は報道写真部部长でしたよね？　僕以外のヒーローを知ってるんですか？」

そんな僕の質問に彼女は指を三本立てて見せる。

「私が事件現場で見た事あるのは赤と黄色と青の三人」

黄色。僕の出会った赤い人の他にもやはりいるようだ。

赤い人は女性、黄色は大柄な男性とのこと。さすがに正体まではわからないそうだ。――僕を除いて。

「他に君の事を知ってるのは？」

「母と二人暮らしなんですけど、知ってるのは母ともう一人だけです」

幼い頃に怪我をさせた友人達を除けば、母親と、父の親友だという男の人だけ。

父親代わりと言っては何だが僕にヒーローとしてのあり方を文字

通り叩きこんでくれた恩人だ。

僕が生まれてすぐに父親は行方不明。残念ながら顔は写真でしか見たことが無い。

斜に構えたような性格で、その友人、名前は将吾さんというのが悪く言えば熱血バカな将吾さんとは良いコンビだったらしい。

最近では出会う度に母に求婚していて、僕に「お父さんと呼んでくれ」と言うのが定番。

将を射んとすれば馬を射よ、を実践しているらしいが成果は全く出ていない。

「その、せん……てるる先輩は僕の正体を知ってどうしよう？」

「うーん。特にどうこうするつもりは無いんだけど、ちょっと君の事が知りたかっただけで」

てっきり脅迫でもされるのかと思ったけど、彼女はただの好奇心だと否定する。

良かった。強請られても元手が無いからどうしようと思ってた。

「そういえば何も注文してないけど、ひょっとしてお金無い？」

僕はその言葉に何も答えずそっぽを向く。

財布の中に七百元、ポケットの中に六百元、合計千三百円でデパートに臨んだのはさすがに無謀だったと思う。

毎月の小遣い支給日は母親の給料日の翌日。五月の連休を控えたこの時期の出費は避けたい。

「じゃあ、デートの定番として遊園地にでも行こうか。チケットはこないだ新聞部から報酬としてもらったのがあるし」

聞くと、新聞部の報酬は現金ではなく現物支給との事。

学校内で発行する新聞は地元の商店街がスポンサーだそうだ。広告を載せる代わりに割引券やチケットが渡されるらしい。報道写真部はそれが目当てで動いているそうだ。

「だから、ここの割引券も持ってるよ」

そう言って、割引券を使ってお金を支払う先輩。そういう事なら僕も何か注文しておくべきだった。

「さて、そこまで行くには当然バスに乗るわけだけど……」

二百円の出費か。深刻に悩む。

「回数券があるからいいよ」

ああ。後光が差して見える。

こうして僕達のデートの場は遊園地へと移ったのだった。

「すみません、ちょっと休ませてください」

デートが始まって三時間。何かを要求される事も無く遊園地に連れて来られた。

そして、延々絶叫マシンに付き合わされる僕。

「なに？ ヒーローがもうへばったの？」

「勘弁してくださいよ。自由に空を飛ぶのと固定されて飛ばされる

のじゃ勝手が違うんですから」

そんな時、懷で携帯電話が震える。

ほぼ同時に先輩の方からも軽快な着信メロディが流れてくる。

「電話が終わったら、今度はアレね」

世界最速を謳うジェットコースターが指の先を通り過ぎていく。
戦々恐々としながらもうなずくと先輩はいつもの笑顔で笑い掛けると少し離れた所に。

懷から携帯を取り出す。液晶に表示された名前は「赤木将吾」。

「もしもし。どうしたんですか将吾さん？」

電話の向こうからは楽しい将吾さんの声が響く。

「そろそろお父さんと呼んでくれる気になったかい？」

いつものアレだ。いいかげん諦めてほしい。
だから敢えてその問いには答えない。

「そういえば、母がこないだ話してくれたんですけど、職場の若い社員に交際を申し込まれたそうですよ？」

「何?! そ、それで由真くんは何と？」

「私もまだまだ捨てたもんじゃないわね、と笑ってました。交際自体は断ったらしいですよ」

「そ、そうか。それは良かった」

あからさまに安堵した様子の将吾さん。少しからかいすぎたかと反省。

「それで結局、何の用ですか？」

「今日はデートだそうだね」

……なぜ、知ってる？！

母さんにだってそんなことは言っていない。

「いや、カマを掛けただけなんだけど、その様子だと凶星だね？」

熱血バカのくせにこういう所で年の功を発揮してくるから困る。

沈黙した僕に彼は滔々と語る。女の子の扱い方からベッドの中で囁く愛の言葉まで。

これだけ説得力のないアドバイスは他には無いだろう。せめて母さんを落としてから言ってほしい。

「せめてホテル代くらいは君が払うんだよ？」

やかましい。未だ語り続ける彼を置いてさっさと通話を切る。

ずいぶんと長く話してしまったが先輩の方はどうなってるんだらうか？

見回すと遠くに先輩の姿が見える。どうやら向こうはまだ通話中らしい。

僕の視線に気付いたのか、通話を終わるところこちらに歩いてくる。

「長かったね？」 「てるる先輩こそ」

何かこう、将吾さんのせいで先輩の事を妙に意識してしまう。

「どうしたの？」

ダメだ。僕は先輩のこの笑顔に弱い。

思えば初めて彼女の姿を見た時からこの笑顔にやられてしまったのだろう。

ここまで来れば認めざるを得ない。僕は彼女に一目惚れしてしまったようだ。

愛だの恋だの体験したことがないからこの感情が本当に恋なのかはわからないけれど。

「あの、せ、てるる先輩……」

意を決した僕はせめて心に産まれたこの感情を彼女に伝えようとし、そして。

地面が揺れた。

「あれ？ 地震？」

先輩の声にはっと周りを見る。

人々が何故か必死の形相で出口に殺到していく。

何が何だかわからないまま、人の波から外れると調子の外れた濁声が響き渡る。

「ふーはははー！ この遊園地はたった今から世界征服を企む悪の秘密結社ブラックデモンの刺客ブラックモール様が頂いた！ 逃げろ逃げろ、はっははははー！」

何てタイミングで出てきやがる。

目の前で逃げ惑う人々をのたのたと追い回すずんぐりむっくりした怪人の姿。

「あの、先輩？ モールって何ですか？」

「……モグラね」

ああ、言われてみれば。

ここで出会ったからにはやはり僕が倒すのが当然だろう。決して逃がしはしない。きっちり息の根を止めてやる。

「先輩は急いでここから避難してください」

「でも……」

こんな状況でも取り乱したりしない先輩の様子に感心するが、これは僕の戦いだ。

「先輩は僕にとって大切な人なんです。だから、絶対に僕が守って見せます！」

てるる先輩は頬を赤く染めて口をパクパクとさせる。

今、凄い事言っちゃったんじゃないだろうか僕。

もう一度説得しようとした僕の後ろから男の声が響く。

「良く言っただ、ブルー！ 男はやっぱそうじゃなくちゃな！」

肩を叩くようにして現れたのは僕より少し年上くらいの青年。テレビで良く見る柔道家のように大柄で背も高い。

でも、僕の事をブルーと呼んだ？

てるる先輩はまだ呆けたように僕を見ている。

「ほら、いつまで真っ赤になってんだよ。さっさと変身しようぜレ
ッド」

レッドと呼び掛けられたのは目の前にいる女性。

もちろん、僕の言葉で真っ赤になって硬直したままのてるる先輩である。

「へっ？ えっ、えっ、えええー！ー！？ ちょ、ちょっと待って
くださいよ！先輩がレッドでそっちがイエローで、えええー
ー！？」

「びっくりしたのはこっち。いきなり不意打ち喰らってどうしよう
かと思ったわよ」

てるる先輩は真っ赤になった頬を両手で挟みながら言う。

「何だ？ 惚れたのか？」

「む……ちよっと恥ずかしかっただけよ」

二人の言葉が耳を通り抜ける。

いや、ほんと僕すみません。穴があったら入りたい気分なんです
けど。

「そっちが影になってるな」

「ほら、こっち」

先輩の手が僕を物陰へと引っ張り込む。

「さあ、行くわよ」

二人が左腕を前に突き出し、胸の前に引き寄せると手首に特徴のあるブレスレットが現れる。

先輩のは赤、もう一人は黄色。

右手を交差させながら「変身！」と叫ぶ二人の姿が一瞬にして赤と黄色のスーツに書き変わる。

「本当に仲間、なんだ……」

呆然としていた僕も急かされるように変身する。

一人でも戦えた怪人相手、三人なら瞬殺でした。南無。

「これで三色か。赤青黄とまるで信号機だな」

「ごめんね、騙すようなことをして。私は普通に仲間に入れればいいと言ったのに黄河が試験するとか言い出して……」

申し訳なさそうに謝るてる先輩に黄河正樹と名乗った青年が反論する。

「何言ってやがる。面白そうだから手を出すなって言ったのはそっちだろ」

口論する二人の姿に、改めて仲間が出来たことの嬉しさを感じる。

「てるる先輩」

「何？」

だから、この気持ちを彼女に伝えよう。

「僕はてるる先輩の事が好きです。一目惚れです。僕と付き合ってください」

「へっ？」 「おっ！」

その日、携帯電話のメモリに新たな名前が加わった。

一人は黄河正樹。そして、もう一人は天雲照。

僕の大切な仲間達の名だ。

母さんへの報告会も兼ねた夕食の後、振動と共に『てるる』の文字が液晶で揺れる。

「はい、もしもし？」

「そ、その、返事なんだけど、私はまだあなたのこと、良く知らないし。えーと、だから」

「だから？」

「その、保留ってことで」

「はい。それで構いません。僕もその、急だったからごめんなさい」

「いいの。今日は一日付き合ってくれてありがと。また明後日学校でね？」

「ええ、また学校で」

通話は終わったとボタンを押そうとした僕の耳にその言葉が届く。

「……その、良かったら報道写真部に……」

急いで耳を付けたが既に切られた後だった。

月曜日が楽しみなのは生まれて初めてかもしれない。
そう思いながら眠りに就いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7173h/>

ブルーのちレッドときどきイエロー

2010年10月9日01時46分発行